

戦国の山城

八木城址

散策ガイド

丹波三大山城の一つといわれる「八木城」は、戦国のキリシタン武将内藤ジョアンが最後の城主とも伝えられる幻の山城です。城山からは、広大な亀岡盆地と大堰川の素晴らしい景観が楽しめます。

コース: JR嵯峨野線八木駅—東雲寺・龍興寺—内藤ジョアン碑—城山登山口—城山—(登山口)—春日神社—八木町内—八木駅(行程約8km)



龍興寺 東雲寺



八木駅



ジョアン碑 春日神社



▲城山 標高約330m

※登山は片道約30分の歩程です。
山道は細くなっていますのでご注意ください。

※城山登山のルール

- ①登山中は禁煙。
- ②山野の植物を折ったり、引き抜いたりしないこと。
- ③自分のゴミは持ち帰ること。
- ④他の山林に立ち入らないこと。

城山の環境保護に努め、登山をお楽しみください。(八木町南地区自治会)



●八木町散策ミニ情報

八木城と内藤如庵(ジョアン)

室町時代、細川勝元が丹波を領国として守護するようになり、内藤氏が「八木城」の守護代として任命されたのが永享3年頃(1431)とされています。その後、足利幕府の崩壊とともに明智光秀によって「八木城」は落城しました。「八木城」最後の城主ともいわれるキリシタン武将内藤如庵は、徳川幕府のキリスト教禁教令により日本を追われマニラに流されました。如庵はその後母国日本の地を踏むことなく寛永3年(1626)73歳で波乱の生涯を閉じました。



龍興寺

龍興寺は、室町幕府の管領細川勝元が享徳元年(1452)に創建したと伝えられています。開山には妙心寺五世の義天玄承が招かれました。その後、応仁の乱で京都の妙心寺が焼失する際、兵火を逃れて龍興寺に避難し僧堂を開いたのが妙心寺六世の雪江宗深でした。当時は修行僧が百余人集まったと伝えられています。龍興寺は京都市の龍安寺などとともに妙心寺下の「三龍」と称されています。同寺の鐘楼(南丹市指定文化財)は古く、18世紀中頃までには建築されていたものと考えられています。

(南丹市八木町八木西山6-1)

東雲寺

東雲寺は、元和8年(1622)の創建と伝えられています。龍興寺の塔頭寺院九ヶ院のひとつで、開山は龍興寺の開山義天玄承とされています。雪江宗深が龍興寺に避難し、同寺で修行僧の教育指導にあたられていたとき、禅師が起居されていたのが東雲寺と伝えられています。(南丹市八木町八木西山3)



お問い合わせ:八木町観光協会事務局 TEL0771-42-5850
八木町の散策情報は、八木町観光協会ホームページからご覧になれます。<http://nantanyaginavi.com>



八木駅周辺の食べものミニ情報

散策した後の食事、休憩、お土産に是非。



●西洋料理屋レストランいけじゅう
ハンバーグ、日替わりランチ他
TEL0771-42-2034
定休日:木曜日(祝祭日の場合は営業)



●a Cake TEL0771-20-4965
ロールケーキ他
定休日:水曜日(不定休)



●米儀福寿堂
如安、栗大納言、カステラ他
TEL0771-42-2245
定休日:水曜日



●HIRANO
コーヒー、ぜんざい他
TEL0771-42-2016
定休日:月曜日

●お食事処まるや
丼類、麺類、オムライス他
TEL0771-42-2020
定休日:第2、第4日曜日



●森彦菓舗 TEL0771-42-2158
丹栗最中、かの草、わらび餅他
定休日:日曜日

キリシタン武将内藤ジョアンゆかりの「八木城」 明智光秀の丹波攻略によって落城する

■「八木城」について

八木城は南丹市八木町の城山(標高330[㍎])に築かれていたと伝えられる山城です。現在確認される遺構の規模(東西約700[㍎]×南北約900[㍎])からは、戦国期丹波でも有数の山城であったことがうかがえます。当時、氷上の黒井城(兵庫県丹波市)、多紀の八上城(兵庫県篠山市)と並ぶ丹波三大山城のひとつと伝えられる所以です。八木城の築城年代は明らかではありませんが、内藤氏が戦功により足利尊氏より八木の地を賜り八木城を築城したと伝えられています。室町時代、細川氏が丹波を領国として守護するようになると、永享3年頃(1431年)八木城の内藤氏が丹波守護代として任命され、八木城を拠点として丹波地方での勢力を拡大していきました。度重なる合戦は一進一退、内藤氏は戦乱の時代を血生臭く走り続けて行きました。織田信長が足利義昭を京都から追放し、足利幕府が崩壊すると、明智光秀による丹波攻略が開始されます。それによって、天正7年(1579)「八木城」は落城します。その後、明智の手で城の改修が行われますが、本能寺の変後、廃城となりました。

■内藤如庵(ジョアン)について

キリシタン武将内藤如庵の消息は、当時の厳しいキリシタン弾圧によって、記録などが悉く書き換えられ、その実像が霧の中に包まれていました。近年、ローマイエズス会の古文書や、宣教師ルイス・フロイスの著書の翻訳によって漸くその人物像が浮かび上がってきています。如庵は内藤家の息女と松永甚介の間に生まれた子であろうとされています。早くからキリシタン信仰の影響をうけて育ち、永禄8年(1565)に洗礼を受けたとイエズス会文書は伝えています。如庵の父は八木城主として戦場に明け暮れていましたが、如庵が受洗したその年に出陣先でこの世を去りました。跡目は如庵がキリシタンであることから紛糾したことが推察されます。イエズス会文書は如庵を城主とも武将ともとれる種々の表現をしていると言われています。如庵は母の死を契機に八木城を出て、盟友小西行長に合流し朝鮮出兵に参加します。しかし、明国の後ろ盾で膠着、泥沼化した「文禄の役」を、如庵は自ら明国の首都北京に赴き休戦交渉を行い、この戦闘を終結させて無事日本に帰還しました。如庵のキリシタン信仰は深く、その後のキリシタン禁教令による激しいキリシタン弾圧にも屈することなく信仰を貫き通したために、異国の地マニラに流刑となります。しかし、流刑地において予想もしなかった歓迎を受け、この地で、医書や教義書の翻訳に明け暮れ、つつましい信仰生活を送りながら、寛永3年(1626)73歳で波瀾の生涯を閉じました。

■龍興寺

龍興寺は室町幕府の管領細川勝元により享徳元年(1452)に創建されたと伝えられています。妙心寺下の三龍(龍安寺、龍潭寺、龍興寺)の一つと伝えられています。応仁の乱で京都妙心寺が焼失する際、兵火を逃れ、龍興寺に避難し僧堂を開いたのが妙心寺第六世の雪江宗深禅師でした。盛時には百人を超える修行僧が龍興寺に集まったと伝えられています。天正7年(1579)6月、八木城落城に際し本堂、庫裡等総てのの建物が焼失しましたが、天正11年(1582)に再建されました。